

[07_02]情報処理教育広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6768419>

出版情報：情報処理教育広報. 7 (2), 1984-12. Educational Center For Information Processing,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



巻 頭 言

田中 武彦*

理学部化学科の情報処理の講義を担当して6年目になる。この間、情報処理教育センターでは、ACOS 600から700を経てFACOM M360へ計算機システムが增強され、ソフトウェアについても便利な画面エディターや授業支援用コマンド等が次々と利用できるようになった。センターを利用する教官・学生にとっては、使い勝手が年ごとに格段に良くなるという実感があり、大変有難いことだと思っている。しかも、利用者数が急速に増加しつつある状況下でこのことが実現されているのであり、センター職員をはじめ関係各位の並々ならぬ御苦勞の賜物と深く感謝する次第である。

20年程前のことになるが、私が卒業研究のために研究室に配属され初めてコンピューターをいじった当時のシステムは、今のマイコンシステムと比べてもはるかに劣るもので、ユーザーが使用できるメモリーが20Kバイトも無かったと記憶している。データ入力には紙テープが使われ、計算結果は電動タイプライターが一字一字出力していた。もちろんフォートラン等は使えず、アセンブラのようなものでプログラムを書かなければならなかった。これを現在大型計算機センターで大勢のユーザーがTSS端末に向い磁気ディスクに納められた多量のデータを出し入れして計算や文章処理を行い、またレーザープリンターが計算結果の数値やグラフをものすごい勢いではき出している有様と比べると、本当にわずか20年程の間に起った変化なのかとそら恐ろしくさえある。

コンピューターの急速な進歩は研究の方法と内容に大変革をもたらしつつあると言われる。これは化学の分野においても、まさに実感である。理論計算だけを手段として研究を進めるグループの出現が最も著しい例であろうが、私達のように実験を主とする研究室においても、現在手がけている実験のほとんどが、昔なら解析が不可能で試みても無駄であったような種類のものであることに気がつく。今からさらに20年を経た後には、私達はどのようなコンピューターを使用して、どのような研究を進めていることであろうか。

* 理学部化学科教授、情報処理教育センター運営委員